

「研究のあゆみ」に寄せて

成長の著しい幼児期の子どもたちが、からだを十分に動かすことは、身体的な発達ばかりでなく、人間が生きていくために必要な諸能力の発達をうながすといわれています。子どもたちが楽しみながら積極的に体を動かして遊び、自分のからだをコントロールして思いのままに動くことができるようになることは、自分の外の世界に働きかける機会やそれによる経験を増やし、望ましい発達につながると考えます。例えば、鬼遊びは、鬼と子に別れて追いかっこをします。その主な動きは「はしる」ことですが、状況に応じて前方ばかりか後方や側方に、また、静止から、あるいは、ゆっくり走っている状態から急に走り出すなど、走る方向や速度を変える必要があります。このような経験は、からだをコントロールする能力を向上させていきます。さらに、「はしる」動きに、鬼につかまらないように「かわす」「すり抜ける」子を「つかまえる」といった動きが複合的に加わり、動きのレパートリーも増加し、さまざまな動きが身につけていきます。

一方、鬼遊びのような運動遊びでは、からだのみが使われているのではなく、「頭」も使われています。つまり、子どもたちは頭の中でさまざまな思考を巡らせながら、遊んでいるのです。鬼遊びでいえば、常に自分の置かれた周囲の状況を把握し、状況に合う行動を選択しながら遊んでいます。鬼は「誰を捕まえようか」、「どうやってつかまえようか」、子は「鬼につかまらないようにするためにはどうすればよいか」などと常に考えて動いています。このように、周囲の状況を把握したり、状況に合う行動を選択したり、粘り強く行動するというような過程で、子どもたちはメタ認知や創造性、忍耐力といった能力も身に付けていくと考えられます。このような能力は「非認知スキル」と呼ばれています。詳しい説明は他に譲ることにしますが、学校卒業後の社会生活に影響を及ぼすといわれ、近年注目されています。運動能力のように、客観テストによって評価(数値化)できるスキル(能力)を「認知スキル」といいますが、幼児期の子どもたちが、「運動遊び」に積極的に取り組むことは、「認知スキル」ばかりでなく、「非認知スキル」も発達させる可能性があるといえます。運動遊びについて、以上のような側面についても目を向けて考えてみることも必要なのではないのでしょうか。

柏市幼児教育共同研究では、「みんなで運動遊びが大好きな子どもを育てよう」というテーマのもとで研究が進められてきています。この研究も、今年で7年目を迎えました。この間、各園ではそれぞれの特色に応じて、共同研究のテーマに沿った取り組みが行われてきています。研究発表会でのすみれ幼稚園の発表に見られるように、「遊びの分析シート」を用いて子どもたちの動きの質の評価を行い、それにもとづいた運動遊びの環境づくりや実践が行われるなど、各園における研究も深化しています。また、各園における活動報告からは、子どもたちが運動遊びに楽しみながら取り組むことのできる環境づくりやの活動に意欲的に取り組む姿をうかがうことができます。「継続は力なり」といわれますが、今後も運動遊びを中心としたこの取り組みが継続され、子どもたちの健やかな育ちにつながることを願っております。

来年度以降も、共同推進委員会の先生方を中心として、各園の先生方のご協力のもと、さらに本研究の推進、充実が図られることを願っております。